

松浦高嶺・速水敏彦・高橋 秀

『学生反乱 一九六九 立教大学文学部』

(刀水書房、2005年、281頁)

寺崎 昌男(立教学院調査役)

本書を贈呈されたとき、思わず目を疑った。

先ず書名である。『学生反乱——一九六九』——今どき全く珍しい。この上なく従順になった学生諸君を前にし、ときには小手先の「改革」にも着手せざるを得ない現在の大学世界にいと、「学生」が書名になることも、ましてやそれに「反乱」という語が続くことも、まことに奇異に思える。次いで「一九六九」という年号である。この年に生まれた者ですら三七歳であり、当時の学生たちといえは還暦を目前にしている。歴史書出版に定評ある刀水書房の刊行とはいえ、「レトロ」を売りにした本なのか。

だがこうした憶測は一読するうちに消え去る。それどころか、この本が示しているのは、戦後日本社会が持ちえた最高の知性と人間的誠実の軌跡であり、あの大学紛争の最良の遺産証明なのだということが分かってくる。その遺産はまた、立教という知の共同体が独自に生み出した財宝である。紛争の激しかった他の私学を当時卒業

した評者の知人は、本書を読んで「あのころこんなに真面目に学生の相手をした先生たちがいたのですねえ」と心の底から感嘆していた。どこをとっても、母校在学中にはとても見ることでできなかった光景だというのである。

三名の著者は、一九六八年からその後数年にかけて文学部の学部長代理あるいは学部長を勤めた。専攻はイギリス近代史学、キリスト教学、古典古代史学で、全員名譽教授号を得ている。三氏は、紛争時に学生たちと対峙し、ときには互いに論争し、また深い信頼のうえに立つて相互に役割を分かち合い、同時に自らの学問精神を磨き合った。本書はその全姿を伝える。そして同時に、当時の立教の学生たちがいかに真剣な問いを投げかけたかも、分かってくる。

全体は二部に分かれる。主な目次を掲げておこう。

第I部は「六九年立教大学文学部闘争ノート」と題され、

第一章 日録 (高橋 秀)

第二章 六九年ノート (高橋 秀)

第三章 新しい大学像を求めて (速水敏彦)

という構成になっている。

第II部は松浦高嶺氏による論考で、「紛争の筆頭責任者としての回想」と題されている。

『立教学院史研究』である本誌にこの書を紹介する理由をとりあえず書くとするれば、正確詳細な記録性と資料復刻の意義にあるということになる。

特に重要な価値をもつのは、高橋氏による第I部第一章である。

紛争の発端たるフランス文学科教員人事問題がおきた一九六九年三月末から七〇年三月末までの一年余の期間の記録が記されている。この間、立教は機動隊の導入を排し、六号館を占拠した学生達の封鎖を教員たちの手で自主解除し、授業状態に復帰した。またこの間六回にわたる大衆団交が開かれ、文学部教員の大多数による「自己批判書」が書かれたことが、マスコミに揶揄的に報道されたこともあった。高橋氏は、この経緯を、自身の日記を縦軸とし、横軸には文学部の学生関係資料を配し、「反乱」とそれに対する教師たちの応答をダイナミックに記している。戦後立教大学史の最も鮮烈な一コマを語るクロノロジーである。

第二章は当時チャペルニュースに掲載された文学部教師の座談会と学生たちの座談会、その他の学生たちの文章を中心に構成されている。文学部だけでなくさまざまな学部の学生や大学院生が論じ合っている。

第三章は速水氏による率直な闘争追憶である。貴重なことに、文学部の「理念・機構」委員会報告書(一九六

九年十月)の全文が復刻されている。

第II部は、松浦氏による研究歴の回想と論争当時の意見書の復刻である。

総ページ数のほとんど三分の一に及ぶこの「回想」を詳しく紹介する余裕はない。概略だけを記そう。著者は戦時下の東京大学を繰り上げ卒業で去り、兵卒として従軍したのち敗戦、大学復帰、そして卒業後は西洋史学徒として歩み、戦後日本における天皇制の変化と戦後思想における戦争責任の不在とに直面してきた。このすべてを緊張に満ちた文体で語り、併せて、いかにイギリス思想史研究の戦後を体験してきたかを記す。その渦中で、イギリスのニュー・レフトの運動にも出会い、六九年五月、突然選ばれた文学部長代理として、学生たちにかに対峙したかを語る。

この文章は、半生回顧であるとともに研究自伝でもあるが、同時に戦後日本社会科学思想史の貴重な証言である。歴史家としての研究と省察のうえに紛争への対応があったのであり、それらがまた学生たちの問題提起に対する理解と対応、さらには運動と学内状況の洞察とにかに生きたかを知ることができる。松浦氏は、学生反乱は「われわれ自身の責任倫理が問われる試練の時だったのである」と記している。

評者は、この書がカバーする時期から五年後の一九七

四年春に文学部にお招きいただき、五年間教鞭をとった。今にして思えば、各分野の個性豊かな碩学たちと席を同じくする幸運に恵まれたことになる。だが同時に、学部内の学科・コースを越えた厳格きわまる相互点検や熾烈な討論に一驚した。大変な緊張感のもとに開かれていたカリキュラム説明集会（現在も行われている）に教務委員長として参与したり、理念委員長を勤めたこともある。

「大学とは何と忙しいところか」と呆れたものだが、あの忙しさは「大学だから」起きたものではなかった。「立教大学文学部だから」起きたのだった。言葉を換えると、本書を読んで、「あれは新任大学教師として遭遇した稀少な現職教育だったのだ」と思い知った。さらにいうと、著者たちが掲げた「現代社会における人間学の再創造」という理念の学習課程に投げ込まれ、人文科学変革運動に思いもよらず参加したのだった。

本書ならびに古市進・速水敏彦・林伸郎・野村浩一・住谷一彦・渡辺一民・山田昭次それに筆者も加わった座談会記録『研究と教育の場としての立教―その歴史を語る』（二〇〇四年十二月、総長室刊）の二つの書は、立教の研究と教育の内実を―決してそのすべてではないとしても、少なくとも最重要な一面を―正確直截に語る記録だと言つてよい。この両書のおかげで、なぜ立教で例えば全カリのような特色あるリベラル・アーツ教育の

組織が生まれたか、その理由がよく分かった、と述懐したベテランの教育ジャーナリストもいる（山岸駿介「立教大学全カリ」（改革進化論二、『Between』二〇〇五年一〇―十一月号）。「造反教授による大学告発書」や「全共闘回顧録」といった出版物とは全く違う。学院史資料としても得がたい文献だと言えよう。

最後に、評者が感銘を受けた多くの章句の中から、二つを選んで紹介しておこう。

「これまで立教大学において見られたような学問とキリスト教の形式的、慣習的、制度的介入は、徹底的に問い直されなければならない。しかして、立教大学構成員は、すべてキリスト教が真に大学をして大学たらしむるにたるもの、人間社会をして真に人間社会たらしむる力あるものであるか否かを、主体的にキリスト教に問うと共に、大学におけるキリスト者は、そのキリスト教信仰の見地から、大学における学問研究・教育、その自治を根元的に問いかえず姿勢を堅持すべきであろう。われわれは、かかる大学とキリスト教とのきびしい緊張関係のなかにおいて、立教大学が、真理研究の運動体として、その創造的生命を賦与されることを期待するものである」（速水敏彦「立教大学とキリスト教」、六五頁）。

「私は学生諸君が好んで使用する『自己批判』なる用語の概念規定について、ついに（大衆団交の）最後まで

納得のゆくの確な説明を得られなかった。私自身の推測では、この言葉は、敵対的關係のもとの一方が、他方の弾劾の論理に完全に屈服した時、敵対から連帯への革命的転換をとげるための主体的な努力の第一歩を表示するものとして、用いられるのではなからうか。その意味で、『自己批判』は『自己否定』ないしは『自己変革』と類語であるようにも見受けられる。私のいう『自律的反省』は、そのような概念としての『自己批判』とは峻別されねばならない。「大衆団交の際に提出した「自己批判書」を「自律的反省書」と題した理由に関して述べられたもの」(松浦高嶺、序文 viii — ix頁、注5。)